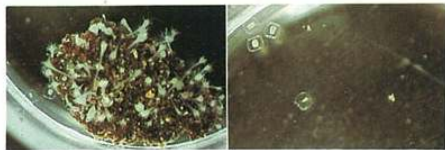
シーワールドのアニマル達

●カニウミヒドラ

今年2月22日の天皇陛下行幸の折には、ご小憩の間に陛下のご専門であられるヒドロ虫類のいくつかをご熱心にご観察いただきましたが、日頃は目立たないヒドロ虫類の仲間のカニウミヒドラも、この日ばかりは大スターといったところでした。

カニウミヒドラはクラゲやイソギンチャクと同じ腔腸動物の仲間でヒドロ虫類に属し、主にタカアシガニに付着していますが、一般のヒドロ虫類と同様に極めて小さいため、水族館で特別に展示しないかぎり、見落してしまいます。当館のカニウミヒドラは海からタカアシガニにくっついて入ってきて、水槽の中で繁殖し、今では、白っぽい5㎜ぐらいのポリプがあっちこっちに苔のように群体となって付着しています。そして海水中に含まれているプランクトンの他、冷凍アミやエビ等の小さな餌くずを食べて成育しています。

水槽に付着しているカニウミヒドラの一部をはがして顕微鏡（10倍ぐらい）でのぞいて見るとまるで花のおしべとめしべのような美しいポリプが見えます。このポリプに刺激を与えると、触手がイソギンチャクと同じように伸びたり縮んだりする光景が見られます。ポリプには餌をとるポリプ（栄養ポリプ）と繁殖するためのポリプ（生殖ポリプ）などがあり、生殖ポリプからは小さなクラゲが出てきますが、大きくなってもわずか10㎜ほどにしかならず大変かわいいクラゲです。

このカニウミヒドラの他にも水族館の水槽の中にはヒドロ虫の仲間やコケ虫など、拡大して見ると、びっくりするほど美しい姿の生物に出会うこともありますので、興味を持たれた方は、注意深く水槽の中をのぞいて見たらいかがでしょうか。（森田）

▲カニウミヒドラ *Stylactis sp.* のポリプ(左)とクラゲ(右)

●カマイルカ

シャチイルカショープールの隣りに、オキゴンドウと一緒に4頭のカマイルカが飼育されています。このカマイルカ達は、昨年の春に県内の富山町岩井の定置網に迷い込んだイルカ達で（さかまたNo.22参照）、もうすっかり馴れ、食事の時間が来ると、決められた場所に行儀よく並び、係員に餌を催足するようになりました。また、訓練中には、美しい体色とその俊敏な動きが人目を引くのか、プールの周りに集まって歓声をあげるチビッ子達や、カマイルカのジャンプ姿をバックに記念撮影をするお客様もいます。時には、プールをのぞき込むお客様を相手に、日頃の訓練の成果を披露し、餌のおねだりをするものもいて、未来のスターとして、早くも芸達者ぶりを発揮しています。

このように、カマイルカはなかなかの人気者ですが、自然海では、どのように暮らしているのでしょうか。カマイルカは、日本近海に多数生息しており、20頭から100頭ほどの小群で行動することもありますが、数百から数千頭もの大群を作ることも珍らしくありません。餌はハダカイワシや小型のイカ類を主食としていますが、岸近くで生活する時には、サバなども食べています。春や秋には岸に近づき定置網に迷い込んでしまうこともしばしばありますが、夏には岸から離れ沖合の広い海で暮らしているようです。春や秋の岸に近づく季節には、東京湾を行きかうフェリーボートなどからも時々観察されることがありますので、皆様も旅の途中、イルカ探しを楽しまれてはいかがでしょうか。（岡田）

▲カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens*

さかまた No.24 （禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日 昭和59年12月

さかまた

鴨川シーワールド NO.24

常陸宮、同妃両殿下お成り

▲シーワールドにお着きになられた両殿下

常陸宮同妃両殿下には、昭和59年10月5日から7日までの3日間、千葉県で開催された日本青年会議所第33回全国大会にご来臨され、10月6日には、鴨川シーワールドもご視察の栄誉を賜わりました。当日、ご料車で鴨川シーワールドにご到着になられた両殿下は、出村徳衛社長、鳥羽山照夫水族館長をはじめ職員、観客の奉迎にこたえられつつ、社長のご先導により、シーワールド内にある国際海洋生物研究所に向われました。出村社長より当館の概要説明をお受けになられた後、クラゲの仲間のヒドロ虫類やトラザメの卵発生を顕微鏡でご観察いただきました。

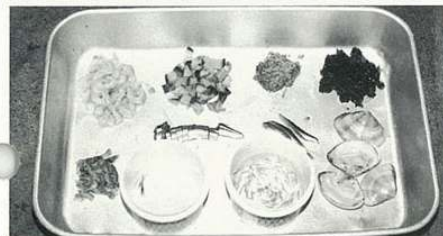
▲マリンシアターでベルーガショーをご覧になられる両殿下

▲シャチ・イルカショーをお楽しみになられる両殿下

パノリウムでは、水族館長のご説明により、マンボウ、タチウオをはじめ、日本近海産水族や国立極地研究所から委託飼育中の南極産水族などをご覧いただき、常陸宮殿下みずから妃殿下にご説明されるなど、ご熱心にご視察いただきました。

ベルーガーの水中ショーが演じられるマリンシアターとシャチイルカショープールでは、鴨川、天津小湊地区のボーイスカウト、ガールスカウト、カブスカウトの隊員たちとご一緒にショーを楽しまれ、つづいて、ヌイグルミのようなセイウチのタックとムックや、10月4日に新しく仲間入りしたキタゾウアザラシ達への給餌をご覧いただきました。特に妃殿下にはセイウチに大変興味をお示しのご様子でセイウチのかわいい仕草に笑顔をたやさずご観察なさっておられました。（榊原）

魚の食事メニューと食事時間

当館では、現在約 350種、3500尾の魚類を飼育展示していますが、これらすべての魚達の食事をまかなう餌の量は一日30kg以上にもなります。魚の餌といってもそれぞれ餌の種類、調理方法、量、与え方、食事時間などが違い千差万別です。たとえばメニュー（餌の種類）だけでもアジやイワシなどの魚肉をはじめ、イカ、エビ、二枚貝、海藻など常に40〜50種類が用意されています。

▲魚の食事メニュー

水族館や動物園で飼育されている動物達は、野性で生捕られて飼育されることが多いため、まず餌付けをすることが大変重要となってきます。魚達では、自然の川や海で生活をしている時、どのような餌を喰べていたのかという食性から調べていきます。食性がまったくわからない魚を初めて飼育する場合には、魚の胃内容物を調べます。胃内容物は大部分が消化されていても、餌となった魚の骨やイカのくちばし、カニやエビの殻などが未消化で残っていることがあり、おおよそ、どのようなものを喰べていたのかがわかるからです。

▲魚の胃から出てきたイカのくちばし

タチウオの食性を調査した時のこと、今までイワシやイカナゴなど小さな魚を喰べていることは知られていましたが、全長80cmのタチウオが25〜30cmのサンマを丸ごと3尾も喰べていた例には驚かされました。

このようにして自然の中で喰べている餌の種類がわかったならば、できるだけそれに近いメニューを用意し、餌付けを開始します。しかし、そのメニューを好まずどうしても喰べない時には、イワシ、ドジョウ、エビ、貝、プランクトンなど活き餌を使い、その魚が体力を使い果たし弱ってしまう前に餌付けなければなりません。一般に小さい魚ほど体力がないため、早く餌付くように努めますが、大きい魚や年老いた魚も新しい環境になれにくいため、なかなか餌を喰べてくれず餌付けに苦労をします。１ｍ近いビワコオオナマズでは約6ヶ月、80cmのコブダイでは3ヶ月も絶食しつづけたことがあり、あの手この手を駆使しやっと餌付いたことがありました。餌付いた魚を活き餌でそのまま飼育を続けることは、餌の入手や管理が難かしいので、給餌方法も含め徐々に簡単な方法に切り換えていきます。また、タカアシガニでは、同じメニューを20日間も続けて与えていると、食欲が低下しだし、メニューを変えると再び元の食欲に戻ったり、また、アユのように成長に伴なって食性が変わる魚の場合、プランクトンから硅藻に餌を変えるなど、餌付いた魚でも健康状態や成長を見ながらメニューを変更していくようにしています。

魚の食事時間は、釣りのことばの中に「朝まずめ」「夕まずめ」（朝夕の薄暗い時に魚がよく釣れる意味）ということばがあるように、主に朝夕と言われていますが、食事時間が夜間の夜行性の魚や、常時餌を喰べている魚の仔どもたちなどもいて、食事時間は様々です。水族館でもそれぞれの時間に合わせて、夜間に食事をする魚には夜食を水槽に入れておいたり、魚の仔どもには常に水槽の中に活きたプランクトンを入れておくようにしています。しかし、大部分の魚達には、餌の喰べ方や餌を喰べる時の行動によって、健康状態を観察するために「夕まずめ」に与えています。

▲マンボウの給餌

魚が食事をする光景は、皆様にとっても、興味深いことと思います。当館では、珍しいアンコウの食事を毎日曜日の昼頃に、一般のお客様に見ていただくようにしています。その他にも毎日10時頃にはマンボウの給餌、昼前後にはタツノオトシゴや珊瑚礁の魚にプランクトンを与えるなど、魚の食事光景をできるだけ多くのお客様に観察してもらえるように工夫しています。（金銅）

新しい仲間、キタゾウアザラシお目見得！

▲「早くプールに入りたいな〜」大きな瞳をキラキラさせてあたりをうかがうオス

今年10月4日、アメリカカリフォルニア州サンディエゴ市にあるサンディエゴシーワールドから、オスとメスの2頭のキタゾウアザラシが、新しい仲間として当館に来ました。

2頭のキタゾウアザラシは、サンディエゴシーワールドの職員1名に付添われ、26時間の長旅にもたえ、大型ジェット機とトラックを乗りついで、鴨川に無事到着したのです。

出迎えの人々が見守る中、体長、体重、性別などが調べられた後、クレーン車やフォークリフトを使って、プールに運び込まれたキタゾウアザラシは、オスが体長203cm、体重235kg、メスは体長190cm、体重205kgのまだ1才半の仔どもで、ゾウアザラシの特徴の大きな鼻は見られませんでしたが、クリクリした大きな目がとても印象的でした。

プールに放たれたキタゾウアザラシは、新しい環境にとまどったのか、あらかじめ用意されたエサには興味を示さず、2頭でプールの角の方に集まり、丸い目をキョロつかせながら係員の動きや周囲を気にして、落着かない様子でした。一夜明けた翌日には、オスはステージに上って係員の手からエサをたべ始めましたが、メスは水中でエサをたべるのみで、8日間はステージには上ってきませんでした。しかし、今では2頭共係員が飼育場にやって来ると、プールの中からはい上ってきて、柔かい上体を反らせてエサをねだるまでに馴れてきました。特に晴天の暖かい日には、2頭で寄りそい仲良く日だまりに寝そべり、昼寝をすることが多く、野生の時と同じようなゆとりが感じられています。こんな時には、係員が近づいてもまったく気づかず、エサを与えようとゆり起こした時などは、半分寝ぼけ顔で目を開け、前肢で頭や顔をこすり、人間とそっくりの仕草をするので、思わずほほえんでしまうこともあり、体の大きな割りには、意外と親しみやすい面を持っています。

▲出迎えの人々の見守る中、26時間の長旅の末、無事シーワールド到着

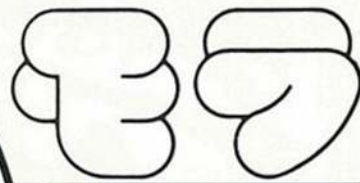
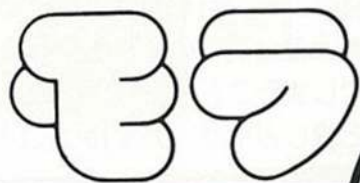
◀サンディエゴシーワールドからの付添人トム・ゴフ氏に歓迎の花束贈呈

2頭仲良く上陸してエサをねだるようになった(14日目)

キタゾウアザラシは、アメリカ西海岸沿いに分布し、成長するとオスは、体長4 〜 5m、体重2〜3トン、メスは、体長2〜3m、体重900kgにもなります。ゾウアザラシの仲間には、この他に南半球に生息するミナミゾウアザラシがいますが、これらゾウアザラシ類は、ヒレアシ類中最大の動物なのです。

キタゾウアザラシの飼育は、アメリカ、メキシコ、カナダ、デンマーク、ドイツなどでおこなわれたことがありますが、現在では、アメリカ、カナダ、日本の3ケ国で飼育されているにすぎません。そこで、シーワールドでは、環境に早く馴れ、元気に育ってくれることを願って、貴重なキタゾウアザラシのために、新たに「ヒレアシ類特別展示舎」をセイウチ舎の隣りに新設しておりますので新春から皆様方にご覧いただくことができるものと思っています。ご期待下さい。　（佐伯）

▲柔かい体を曲げ、特意なポーズのオス

係員にもすっかりなれ握手であいさつするオス▶
(29日目)

●アシカ類の繁殖

昭和56年以来、アシカ類の繁殖が続き、今年も3頭の仔アシカが生まれ、これで、シーワールド生まれのアシカは、合計6頭になりました。

今年生まれた仔アシカは、カリフォルニアアシカのオス、メス各1頭とオーストラリアアシカのオス1頭です。6月5日生まれのカルフォルニアアシカの仔は、母獣の乳の出が思わしくなかったため、途中から係員による人工哺乳で元気に育てられています。また、9月5日生まれのオーストラリアアシカの仔は、水族館生まれとしては、世界で3番目という貴重な動物ですので、大切に育てたいと思っています。現在仔アシカ達は、母アシカと一緒に仲良し広場のプールにおり、観客の見守る中、時々岩の上などで、お乳をのんでいるほほえましい光景を見せてくれています。（高橋武）

●夏の魚シイラの展示

漢字のクイズではありませんが、魚偏に暑と書いて、いったい何と読むのでしょう?。鱪…「しいら」と読みます。シイラは世界中の暖海にすむ回遊性の表層魚で、夏の暑い盛りに多く獲れるところから由来した漢字と思われます。鴨川でもマンビ、トウヒャクなどと呼ばれ、6月から9月に大量に獲れます。シイラは縁起の良い魚で、結納品に加えられたり、またマンビ、マンサクとか[illegible]われることから豊年万作という言葉にもつながるおめでたい魚でもあります。この夏らしい魚、シイラを7月から展示したところ、多勢のお客様が、水槽の中で体を黄金色に輝かせ、尾を大きく動かして泳ぐシイラに興味をもったり、シイラが鱪と書き夏のイメージをもった季節の魚であることに、「なるほど」とうなずいていたりしていました。（森）

●謝々・中国養父母訪日団

7月9日「中国残留日本人孤児の養父母に感謝する千葉県実行委員会」の招きで来日中の、中国養父母訪日団一行（田炳南団長他4名）が当館を訪れました。一行は、中国の小旗を手にした当社従業員や入園客から熱烈な歓迎を受けたあと、水族館長の案内で館内を見学し、パノリウム内の中国原産の淡水魚、ソウギョ・コクレン・ハクレン・タイリクバラタナゴや、ユーモラスに泳ぐマンボウなどに大変興味を示し、説明に目を輝やかせていました。また、シャチとイルカが繰り広げる豪快なジャンプや、コミカルな動きのアシカのショーにも盛んに拍手を送っていました。日程の都合上、見学時間がわずかでしたが、水族館での楽しいひとときを、十分楽しんでもらうことができ、ほんとに良かったと思っています。（佐久間）

●マンボウ飼育日数1000日突破

昭和59年9月19日、マンボウ（20号）が飼育日数1000日となりました。当館のマンボウ最長飼育日数971日（愛称ノンキー、昭和56年8月死亡）から比べると大幅な更新といえます。20号は昭和56年12月24日に鴨川沖の定置網で捕獲されたもので、体長72cm、体重約20kgでしたが、今では体長130cm、体重約120kgにも成長しました。現在マスコットコーナーには20号と22号（昭和56年12月26日搬入）の2尾のマンボウがいますが、このようにマンボウが長期間飼育できるようになったのは、今までの飼育経験を生かして、水槽内のビニールフェンスの改良や、消化の良いエサの研究を続けたための成果です。マンボウの生活様式や飼育については、判らないことばかりですが、その生態が少しでも解明できるよう、なお一層の努力をしていくつもりです。

（津崎順）